

艦船のいる セイカツ

～長門編～

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

基本CG枚数:14枚

宿、温泉にて。

「それで、お主はなぜ一緒に入っておるのだ…。」

「だって風邪を引く前に風呂で身体を温めようと言ったのは長門のほうじゃないか。」

「余は…ういっつもりだったわけでは…！」

困り顔のまま「ヨヨヨ」と長門の声小さくなる。口では色々言っているが満更でもない様子だ。

初めて見る髪を結び上げた姿も、すく似合っていてかわいらしい。

「余は雨の日の散歩も好きだぞ。お主はどうだ？」

紫陽花の側にしゃがみこみながら

「さあかき笑顔をいびく可なりへんぞ。」

お、おどろく……

雨の日だと言うのにお日様がそこにあるみたいだ。

長門と一日デート。

「ついさっきまでの晴天がウツだったみたいだな。」

「うむ…夕日にめづりはいいでない…。傘はなくしてしまっし…。」

そういえば、さっきお茶したときにはすでにオレたちの手元に傘はなかった。

ずっと晴れてたせいで置き忘れに気づかなかったか。

ともあれ雨宿りできてひとまず落ち着いた。雨足が弱まるまではここで小休止しよう。

「ほう、これが…」

出てきたお菓子が「キラキラ」と目を輝かせるほど。

普段なら決して見ぬふりできなかった。

役得……

長門は「この手にとってあげしげと眺めると、パクッと頬張りしはらく口の中で転がして味わっていた。

ほろ、っと笑顔がこぼれる。



オレのチンコは暴発し、

長門の鎖に向かって勢いよく精液を吐き出した。

突然の出来事にびっくりしたのか、

長門は目を見開いた状態で硬直してしまった。

「うわっ……すまん、我慢できずにいってしまいました……」

「いった……では余は……」

お主を満足させられたということか？」

「うん、長門のバイズリで射撃した。気持ちよかった……」

「上を全部脱いで見せてくれないか？」
「う、うむ……お主が望むなら……」

試しに言ってみたところ、
彼女はすんなり受け入れてくれた。

オレからのエッチなお願いを素直に聞いてくれるなんて……
あの長門が……
長門はするりと衣服を脱ぎ去ると、
再びいびきに引き直した。

夜はどう過ごす……？

無防備な長門の中へ、
再びゆっくりとチンコを突き入れた。
色んな液体で満たされた膣穴は
最初よりもすんなりと
オレを受け入れた。

それでもキツキツの長門の顔は
オレのチンコを締め上げても寝顔ない。

「ううん、お主が望むなら……」
「上を全部脱いで見せてくれないか？」
「う、うむ……お主が望むなら……」

「試しに言ってみたところ、
彼女はすんなり受け入れてくれた。
オレからのエッチなお願いを素直に聞いてくれるなんて……
あの長門が……
長門はするりと衣服を脱ぎ去ると、
再びいびきに引き直した。」

困り顔でそっつこやく長門……

本編では黒塗りではなく、
モザイク処理になっております。

艦船のいる セイカツ

～長門編～

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

基本CG枚数:14枚



A woman with long dark hair, wearing a red and white kimono, is sitting in a garden. She is holding a small white object in her hands. The background is a lush garden with various plants and flowers.

長門を我が母港に迎え入れてから早数ヶ月。

苦勞のかいあつて親密な関係になれたものの、
彼女は『重桜の巫狐』でオレは指揮官。
お互い自由な時間はほとんどない。

そんなわけでなかなか機会に恵まれなかったが、
ついに今日！

初めて二人きりでの一泊二日の外出デートに「きつた！」

あいにく雨降りで心配していたが…。



「余は雨の日の散歩も好きだぞ。お主はどうだ？」

紫陽花の側にしゃがみこみながら

にこやかな笑顔をこちらに向けてくる長門。

ま、まぶら……

雨の日だとびっしょりのお日様がそこにあるみたいだ。





「じつじつのも悪くないな。

長門が楽しそうにしてるから……うん、思っで。」

「そ、そうか……。」

照れたのが、長門はうつむいてしまった。
かわいらし……





雨がしとしと降る中、
しばらく長門と園内の散策を続けた。

花や木々を眺めたり、
池の鯉と遊んだり。

雨の中でもこうしているとけっこう楽しい。

やがてフツと日の光が射した。

見上げると雲の切れ目からお日様が顔をのぞかせている。



A character with long black hair and fox-like ears is standing on a wooden deck. She is wearing a red and white outfit with gold accents. The background shows a traditional Japanese garden with a pond and a red and white striped umbrella.

「雨上がり…。余はこの一瞬が好きだぞ。
濡れた木々や草花が輝いておる。
余は…このような特別な一時を、
お主とともに過ごしたいのだぞ。」

ちよつと照れくさそうに微笑みかけてくる長門。

長門がいれば毎日が輝くような
特別な日になるに違いない。

ドキドキと胸の鼓動を感じながらオレはそんなことを考えた。



「少し付き合ってもらってもよいかな？
お主もたまには神前に詣でるがよい。」

神社の参道前に差し掛かったところ、
長門にお参りに誘われた。

言われてみればわざわざ行くところでもない。
これも良い機会か。

それにしても…巫狐だけあって、神社の前だと絵になるな…！







鳥居をくぐり、

雨上がりで人気の少ない参道を抜けて、
拝殿へとやってきた。

一緒にお賽銭を投げ入れて、深々と礼、
そしてパンパンと拍手を打つ。



(これから長門と一緒にいられますように……
ゆくゆくはもっと深い間柄に……)

時間をかけてたっぷり念押しし、願掛けを終えた。

ふと隣を見ると、長門はまだ手を合わせていた。
目を閉じた静かな横顔が美しい。

「……………」

真剣な雰囲気…

長門は「一体どんなことを願っているのだろうか…?」
やはり重桜のこと?それともオレのことだろうか?

色々と考えを巡らせながら、オレは長門の横顔を見つめ続けた。





神社からの帰り道、

近くにおいしい甘味を出す茶屋があるから寄ってみたいと、
と長門を誘った。

普段はあまりこういう店に来ないせいか、
彼女にしては珍しくキョロキョロしている。

店の様子もそうだが、

特にお品書きに並んだお菓子たちに興味津々といった様子だ。

せっかくだからと、いくつかまとめて頼んでみた。



「ほろ、これが…」

出てきたお菓子にキラキラと目を輝かせる長門。

普段なら決して見る事ができない姿だ。

役得……!!

長門はこっ手にとってしげしげと眺めると、

パクッと頬張りしばらく口の中で転がして味わっていた。

ほろ、っと笑顔がこぼれる。



「おいしい……余は、こんなものは初めて食べたぞ。」

「お主、よい甘味処を知っておるな。余はここが気に入ったぞ。」

普段と打って変わって、

年頃の女の子のような笑みを見せる長門。

「こんな様子を見せられたら

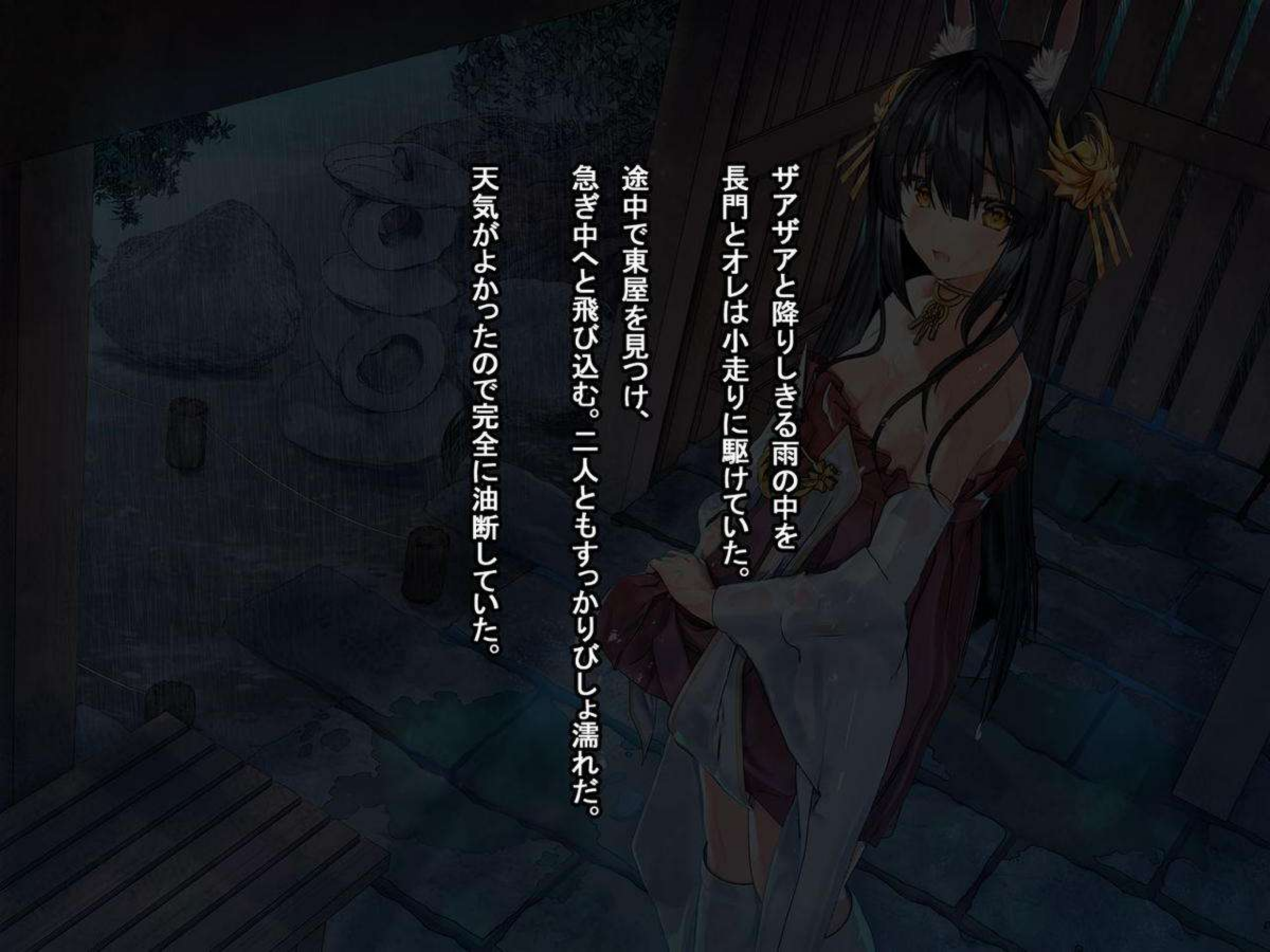
嬉しくて小躍りしてしまうじゃないか！

下調べしておいてよかった！

と心の中でガッツポーズをとったのだった。







ザアザアと降りしきる雨の中を
長門とオレは小走りに駆けていた。

途中で東屋を見つけ、

急ぎ中へと飛び込む。二人ともすっかりびしょ濡れだ。

天気がよかったので完全に油断していた。



A black-haired anime girl with long hair and bunny ears is standing in the rain. She is wearing a red kimono with a white obi and a light blue haori. She has a gold necklace and a gold flower in her hair. She is looking towards the viewer with a slight smile. The background shows a wooden building and a stone path.

「ついさっきまでの晴天がウソだったみたいだな。」

「うむ…タ立にあうとはついてない…。
傘はなくしてしまっし…。」

そういえば、さっきお茶してたときには
すでにオレたちの手元に傘はなかった。

ずっと晴れてたせいで置き忘れに気づかなかったか。

ともあれ雨宿りできてひとまず落ち着いた。
雨足が弱まるまではここで小休止としよう。



何の気なしに長門を見遣ると
彼女は水を含んだ服を絞っていた。

濡れた服が肌に貼り付きうすく透けている。
さらに髪はしっとり艶が出ていて、
独特の色気を醸し出している。

ううむ、好きな人の雨に濡れた姿というのは…目の毒だな。

こちらの視線に気づいたのか、長門が顔を上げた。
オレの姿を見るなり、

彼女は眉根を寄せて心配そうに声をかけてきた。

「お主もびしょ濡れではないか。

風邪を引く前に、

宿に戻ったらすぐに風呂で体を温めるとしようぞ。」

「えっ……？それって、「一緒に……？」

突然の提案にうるたえたオレの問いかけに、

長門は始めキョトンとしていたが、

やがて意味を理解すると耳まで真っ赤になった。

「そっ、そういうハレンチな……！」

余は、そんなつもりでは言っておらぬ……！」

強い口調で否定されてしまった……。



宿、温泉にて。

「それで、お主はなぜ一緒に入っておるのだ……。」


「だって風邪を引く前に風呂で身体を温めようと言ったのは長門のほうじゃないか。」

「余は……う……う……つもりだったわけでは……。」


困り顔のまま「ニョニョニョ」と長門の音が小さくなる。

口では色々言っているが満更でもなさそうだ。

初めて見る髪を結い上げた姿も、
すくく似合っていてかわいらしい。



今回取った部屋は専用の露天風呂の付いた、
いわゆるカップル向けのものである。
もしかしたらこういうイベントもあるかも、
と思って選んだのだが…
当時のオレ、ゲッジョブ…!!



一緒に入ろうとストレートに言った場合は
はつきり断られそうだったので、
先に長門にゆずるふりをして
後からしれっと風呂へ潜り込んでみた。

雨宿り中の長門の言葉に甘えた形だ。

入ってさえしまえば
無理やり追い出すようなことはないはず。



だが長門もなんとなくオレの考えを察していたようで、
一人で入るといふのにタオルでしっかりガードしていた。
ぐぬぬ…。
だがここで折れては指揮官の名がすたる！

「長門、いくら個室の風呂とはいえ、」

「こゝは浴槽じゃない。露天風呂だ。」

「そうそうお湯の入れ替えなんてできるもんじゃない。」

「タオルを巻いたまま浸かるなんてマナーが悪いぞ。」

「そ、それはそうだが…その…お主の視線があるから…」

「だからって重桜の巫狐が」

「民の模範にならない」とはすべきじゃないだろ？」

「う…ぐ…。余は…わかった…」



正論で押されて観念した長門はついにタオルを取り去った。
目の前には「糸まとわぬ長門。」

誰もみることが叶わなかった柔肌が、すぐそこに！

「お主…そんなに見つめるのではない！」

こんなに明るいところで見られるのは…その…恥ずかしいぞ…。
余は、殿方に素肌を晒したことなど一度もないのだ。」

そういう長門は緊張で顔がこわばっていた。

一方で桜色の乳首はツンと固く勃っていて、

長門もまた興奮しているのがわかった。

ふとももに置かれた左手からは、
すでに柔らかな弾力が伝わってきている。

すぐにも彼女の控えめな乳房や腰、
お尻に触れたいところだが…

風呂でのマナー云々を言った手前、
ここで事に及ぶのは示しがつかないだろう。

情動をぐっと堪える。

だけど、この後は…。

長門と過ごす一夜…否が応でも期待が高まってしまった。



「支度をするからしばらくしてから上がってくるがよい」
という長門の言葉に従い、

彼女が出ていった後、十分な時間を開けてから部屋に戻った。

部屋は天井の照明が落とされていて、

行灯の淡い光がぼんやりと中を照らしていた。

そして…布団の上には寝間着をまとった長門が。



母港の寮舎で見かけたときもこの格好だったけど…
やっぱり布地が少ない。
そして透け透けた。

「来たか。え、えーと…」


『不束者ですが、よろしくおねがいします』…。

はは…気恥ずかしいぞ…。

その、お主だけではなく、

余も今夜のことに期待を膨らませておったのだぞ。』





「だから…江風に相談して、夜伽の手ほどきを受けたのだ。
重桜の巫狐として、お主に純潔を捧げるわけにはゆかぬが…
それでもできる限りのことはしたいと考えておる。
今夜は、余に身を任せるがよいぞ。」

そう言って長門は頬を赤く染めながら肩紐に手をかけた。
夜のこと、長門なりに考えていてくれたのか。

しかもそのための準備まで…



胸元の覆いが引き下げられて、
長門のおっぱいがチラリと覗く。

小ぶりながら形のよい膨らみに、
つい視線を奪われてしまう

風呂場で全裸を見たときももちろん興奮したが、
衣服から覗くおっぱいというのも別の趣があるものだ。



「ど、どうだ？余の身体を見て興奮するか？」

江風は、少しずつ肌を晒して殿方を昂ぶらせよ、と……。
もう全部見られてしまった後だが……。」

「大丈夫だ、長門。十分効いているよ。」

そう言って自分の盛り上がった股間を指し示す。

たどたどしい所作で、ためらいがちに誘惑してくる長門……

こんな彼女を目の前にして

平気でいられるわけがないじゃないか！





「上を全部脱いで見せてくれないか？」
「う、うむ……お主が望むなら……。」

試しに言ってみたところ、
彼女はすんなり受け入れてくれた。

オレからのエッチなお願いを素直に聞いてくれるなんて！
あの長門が……！
長門はするりと衣服を脱ぎ去ると、
再び「ちら」向き直った。



彼女のツンと上向いた両胸があらわになる。

胸を隠すわけでもなく
中途半端なところに置かれた右手が
いかにも所在なさげで、
彼女の気恥ずかしさを表していた。

……うん、エッチだ！

「お、お主も！余だけでなくお主も脱ぐがよろしー！
江風との特訓の成果、目にももの見せてやるぞー！」





長門から椅子に腰掛けるように言われ、
窓際の一角へと移動した。

期待感でいっぱい、オレのチンコはち切れんばかりだ。
天を衝くように屹立している。

「これが、お主の男根か…。
意外と大きいものなのだな。」

正面に座った長門が感慨深げにそうつぶやいた。




長門のことだから男性の、

しかも勃起したチンコなんて初めて見るんだらう。

あまりにもまじまじと眺められるものだから、
なんだかオレのほうに恥ずかしくなってきた。


「えっと……。殿方は、男根を乳房で挟むと喜ぶと聞いた。
余の小さな乳房でお主を満足させられるかはわからぬが……
まずはこれを試すぞ。」



どうやら長門はパイズリをしてくれるみたいだ。
その小さなおっぱいでどうやって？と思ったが、
長門は胸を密着させると両手を使っておっぱいで
オレのチンコを挟み込んだ。

そしてそのまま上半身を上下させ、チンコをしゃくきはじめた。


なるほど、全てを包み込まれる肉厚感はないものの、
チンコの根本やカリ首が長門のおっぱいで
ムニムニと擦られて思いの外気持ちいい。



何よりオレのために長門が
一生懸命にがんばっている姿そのものが
オレの気持ちを昂ぶらせた。

「ど、どうだ？…余はうまくできているか？
初めての」どでよくわからぬが。」


「うん、いい感じた。気持ちいいよ。」
「そうか、よかった…。」



ほっと安心した表情を見せた長門は
黙々とオレのチンコをしごき続けた。
とても真剣に。

だけど時折彼女の乳首が内ももに擦れて、
くぐもった甘い声が漏れる。

長門も感じているみたいだ。

An anime-style illustration of a young woman with long, straight black hair and large, expressive golden-yellow eyes. She has a pair of black bunny ears with white fur on top. She is unclothed and is sitting in a traditional Japanese bathhouse (onsen). Her hands are placed over her chest, and her expression is one of slight concern or embarrassment. The background shows the wooden structure of the bathhouse and a window with a view of a sunset or sunrise. The lighting is warm and soft, creating a serene atmosphere.

風呂場から興奮しっぱなしだったオレのチンポ。

そこに視覚と聴覚、

そして触覚で刺激を受け続けて、

そう長く我慢できるはずもなく……。



ビュルッ！ビュルッ！



オレのチンコは暴発し、

長門の顔に向かって勢いよく精液を吐き出した。

突然の出来事にびっくりしたのか、

長門は目を見開いた状態で硬直してしまった。

「うわっ…すまん、我慢できずにいってしまった…。」

「いった…？では余は…」

お主を満足させられたということか？」

「うん、長門のパイズリで射精した。気持ちよかった…。」

ふうっと身体から力が抜けた。

長門の手でいかされたんだと思うとなかなか感慨深い。

長門は長門で、

飛び散った精液を手にとって自身の初戦果を確認していた。

「すんすん……。変な臭い……。これが精液か……。」

オレの精液の臭いを嗅いでいる長門……エロい……

にしても……長門の顔に思いっきりぶっかけてしまった。

精液まみれの顔……これはこれでそそるものがあるな。



「次は、口でやってみようと思っておる……。」
一休みした後、おずおずと長門が言った。
ちよつと驚いた。

これはフェラチオをしてくれると「フニ」か…？

チンコを口に含むなんて抵抗感が強いものと思っていたけど…
それだけ長門が真剣ということかもしれない。

オレにしてみれば長門に啜えてもらえるなんて
めちやくちや嬉しい。嫌がる理由はないぞ。

「これも、練習はしたが余はまだ勝手がわからぬ。

お主が率直に反応してくれると助かるぞ。で、では……。」

二回戦へ向けですでに臨戦態勢のオレのチン「ム」

長門の口がパクリと吸い付いた。

先っぽだけ口に含み、

鈴口あたりを舌先でチロチロ舐められる。

敏感な先っぽをザラザラした舌が這い回るのを感じて、
背筋がゾクゾクしました。

あ、だめだ。これは気持ちよすぎるやつだ。



「あむっっっ。」

亀頭まで、丸ごと長門の口の中に飲み込まれた。
温かな湿り気を帯びた粘膜に包まれて心地よい。

さらに中では、別の意思を持った生き物のように
舌が絡みついてきて、絶え間なく刺激を与えてくる。

決してうまい舌使いというわけではないのだが、
これはオレには耐え難い……!!
情けない声が出てしまう。



長門はじっとオレの表情を伺いながら
舐め方や場所に変化をつけてきた。

オレの一番感じやすいところを探しているみたいだ。
オレが反応すると、同じところを執拗に攻めてくる。
いいように弄ばれてる!!

…だめだ。我慢の限界だ。

このまま長門の口の中に出したい!!
長門を思いつきり汚したい!!



ゴックン…ゴューッ…!

欲望のタガが外れ、

オレは長門の口の中へと自身の精液を盛大に吐き出した。
収まりきらなかった精液が口の端からポタポタとこぼれ出る。

今日二度目だというのがすごい量だ…。

射精が落ち着くまでじっとしていた長門だったが、
やがて口からチンコを引き抜くと精液を吐き出してみせた。
手のひらの上に液溜まりができた。

長門の体内にオレの精液が…

えも言えぬ興奮で背筋がゾクゾクした。


「んべ…。お主、大変な勢いと量だったぞ…。

ふふ、でもこれが余の技に満足した証だと思えば、結構嬉しいものだぞ。」

にこりと笑う長門。

言葉通りとても嬉しそうだ。

初めてで男を二度も射精させられたのだから大戦果といえるだろう。




「すまないな、長門。オレばかり気持ちよくなって、
それじゃあ次はオレが長門を…。」

「よい。余は重桜の巫狐ゆえ、できるのは「こ」までなのだ。
これ以上の行為は純潔を失ってしまうと聞く。」

「それに、お主が満足してくれたのなら…
余はそれで十分だよ。」

ふう…今日は一日歩き通しで余は疲れた…。
「このあたりでもう休まぬか？」



「え…あ…そ、そうか。そうだな。明日のこともあるしな…」
もう少し続きを…と思っていたが、
確かに長門に疲れの色がみえる。
今夜は無理せず…」までか。



その後、オレたちは一通り後片付けを済ませて床に就いた。

…床に就いたのだが。

だめだ！眠れない！

体の興奮が冷めない。

冷める気配がない。

長門に触ってもらって舐めてもらって気持ちよかったけど、オレからはまだ何もしていないんだ！

張り切る長門に身を任せていたから…

オレだって長門に触れたり撫でたり揉んだり舐めたり、色々したかったのに、全部やりそこねた。

なんならキスすらしてないじゃないか！



それに……正直に言えば、二回射精したくらいでは
オレのムラムラは収まっていない。

眠そうな長門に悪く言い出せなかったが、
やっぱりもっと長門とまぐわいたい。

今すぐセックスしたい……！

次に二人で出かける機会なんて数ヶ月はないのだから。

「長門……。長門……。……すまない、起きているか？」

とうとう長門に呼びかけてしまった。

だが返事はなく、すうすうと規則正しい寝息が聞こえるだけだ。

起き上がって近づいてみる。

呼びかけながら軽く肩を叩いてみたが、

長門はぐっすりと深い眠りに落ちていて、

起きる気配は全くない。

デートで歩き回ったことや初めての夜伽の緊張で、
すっかり疲れ果ててしまったのだろう。

エッチはおろか、起こすことすらままならない様子だ。
だけどオレの方もすっかりスイッチが入ってしまっ
て収まりがつかなくなっちゃった。

しかも長門の側に来たせいで、
彼女の甘い体臭に当てられて興奮は高まるばかりだ。
この昂りをどうにかしたい。どうにか。

これは。もう。ああー！。



自製の効かなくなったオレは
衣服を脱ぎ去り全裸になった。

長門の布団をめくる。

いつもの寝間着姿だ。
最低限の部分しか覆われていない、際どい寝間着。



布の上からそっとおっぱいに触れてみる。

ふによんとした感触。

弾力のある膨らみがそこにあった。

ドキドキと胸が高鳴る。

さっきは見るだけだった長門の膨らみに、

今オレは手を触れているんだ。

長門はすやすや眠ったまま、やはり起きる気配はない。



気持ちがどんどん大胆になっていく。

布地をずらしておっぱいを晒し、今度は直に触れてみた。
しっとりした柔らかさ、
そして温もりが手に伝わってくる。

その柔らかさを堪能しようとしてゆっくり揉みしだしてみた。

これが、長門のおっぱい！

適度な弾力が心地いい！

乳首も指でいじる。

つまむようにしてこねていると、

最初はふにふにした触感だったのが次第に固さが増してきて、
同時に長門の吐息が熱を帯びてきた。

「んっ……。ふぁっ……。」


さっきは聞くことができなかった
長門の色っぽい声をする。

オレの与える刺激が長門を興奮させているんだ！
これは…下半身がますます固くなるっ！

長門の方はどうなっているのか気になって、
パンツをずらして触れてみた。

ぬるり。

愛液が外まで染み出している。



そのまま割れ目をなぞるようにつくすと、
しっとり濡れそぼった膣口に
スルリと指が飲み込まれた。

湿った小さな肉穴に指が包まれる。

おそらくフェラやパイズリをしてる最中に

長門自身も興奮していたに違いない。

長門の身体は準備万端だったんだな。



.....
.....
長門に、入れたい。

でも、いくら「」まで親密になったからといって、
勝手に入れるのはどうなんだ？

そもそも長門は

「重桜の巫狐として純潔を捧げるわけにいかぬから」
と云ってたじゃないか。



初めからセックスまではできないってオレ自身もわかってたはず。
それを本人が眠っているのをいいことに中に
入れてしまおうだなんて…。

いや、入れるくらいならギリギリ許されるだろう。

問題なのは彼女が孕んでしまうことであって…

だから中出しさえ避ければ問題ないはず！

というか、「こ」までお膳立てされていて

据え膳を食わぬような真似、今のオレには無理だ！



痛いくらいに充血したチンコを長門の入り口にあてがう。

先端をこすりつけながら、

少しずつ腰を突き出してトロトロになった膣肉をかきわけていく。

中はピツタリと閉じていて、

濡れた膣肉がチンコに吸い付いてくるようだ。

自分の荒い息遣いがはっきり聞こえた。

それで。



プジッ。

薄い抵抗を突き破って、

オレは長門の秘所へと侵入を果たした。


「んん……っ。」

瞬間、長門の眉根がゆがみ苦しそうな吐息が漏れた。

ドキリとしたが、長門は目を覚ますことなく眠ったままだ。

結合部をみると、破瓜の血がわずかに滴っていた。

やっぱり長門は処女だったんだ。



オレは、眠っている間に長門の純潔を奪ってしまった。
罪悪感とともに、えも言われぬ高揚感が溢れてくる。
チンコがさらに固く膨らむ気がした。

長門の中は思ったとおり狭くて、
オレのチンコはミッチリと隙間なく包み込まれている。

同時に中はたっぷり濡れていて
「血のせいもあるかもしれない」、
容易に動くことができそうだった。



ゆっくりと腰を前後させてみる。

きつく締め上げられたチンコがヌルヌルの膣壁に「す」られて、
すぐにでも果ててしまいそうだ。

ちよつとずつ身体を慣らしながら動きを大きくしていく。

……ヤバイ、めちゃくちゃ気持ちいい。

オレは長門が眠り続けているのを「い」といって、
快楽を貪るように腰を動かし続けた。



自分の気持ちのいいところ当たるように、強弱をつけて。

長門はまだ痛みがあるのか、

時折顔をしかめながら熱い吐息をもらす。

自分を慕う少女をまるでオナホールのように扱う罪悪感が、
オレを余計に興奮させた。

もうこれはセックスじゃない。

長門を使ったオナニーだ！



腰を動かすたびに快感はどんどん積み重なって行って、
射精欲もどんどん高まってくる。

もう…もういきそうだ…早く外に…



「うっ、ぐううううう……」

低い唸り声をあげながら、オレは盛大に中出しした。

引き抜くとか無理だった。

最後の瞬間まで長門の膣肉にしごかれたかった。

そして…長門に種付けしたいという性欲に勝てなかった。

結合部からは、

血と混ざった精液がピンク色の粘液とになってこぼれ出していた。

すでに長門に抜いてもらっていたはずなのに、すごい量が出た。
確かにそれだけ気持ちよかった。


…でもオレはまだ満足していないみたいだ。



眠る長門をひっくり返し、
うつ伏せにした。

少し肉の薄い、小ぶりなお尻。
こちらからは彼女の
お尻の穴も膣口も丸見えた。

先程までオレのチンコが入っていた膣穴は、
形を覚えているかのようにうすく開いていた。



すぐに入れたい！
ムラムラした気持ちが湧き上がってくる。






無防備な長門の中へ、
再びゆっくりとチンコを突き入れた。

色んな液体で満たされた膣穴は
最初よりもすんなりと
オレを受け入れた。

それでもキツキツの長門の膣は
オレのチンコを締め上げてきて容赦ない。



再びを挿入を始めると、
正常位のとときと当たりどころが違うように、
腰を打ち付けるたびに
柔らかな尻肉が股間を刺激してきて
余計に気持ちいい。

脳みそがとろけそうになる。

この体位は…はまりそうだな。

腰の前後を繰り返していると
刺激が積み重なって、
すぐにキンタマが煮えたぎってくる。

ああっ射精したい！

長門の中でいききたい！

もうすでに二度中へ出てるんだから、
二度も二度も同じじゃだ。

悩む必要は…ない！





「田すよー田すよー長門の中」
「……」

逡巡していたとさっきと違い、
今度は中で思いっきりぶちまけた。
下半身を密着させて「一番奥までチンコを差し込み、
子宮に直接注ぐつもりで精液を吐き出す。


めちやくちや「気持ちいい。」



射精が終わった後に少し腰を引くと、
中からドロリと精液が溢れ出た。

オレが中出した証。

何も知らずに眠っている長門の表情との対比が強烈で…
オレはどんどん歯止めが効かなくなっていくた。



その夜は長門にもう4度中出しをして、
最後には透明な液体しか出なくなっていて、
そこでようやくオレは収まったのだった。

結局長門は最後まで…

オレが全てを片付けて元通りに戻すまで、
目をさますことがなかった。



布団に横になり、冷静になった頭で考える。

どう考えたって今回の行為は…

信頼を寄せてくれた長門に対する重大な裏切りだ。

長門はオレとの一夜をどう過ごすか考えて、

準備をして、献身的にこなしてくれたというのに…

一方のオレは欲望に身を任せて、

眠っている長門を犯した挙げ句、

勝手に中出しまでしてしまった。

バレないように工作までして隠す気満々のオレ…。

はたして明日、長門に合わせる顔はあるのだろうか。



翌日、オレたちは普通に朝を迎え、
残りの旅程をこなして母港への帰路についた。

長門は寝ている間のことは何も気づいてない様子で、
その前の夜伽のことをただ気恥ずかしそうに話すだけだった。

それで結局……………

その後の出来事をオレは黙っていることにした。



案の定オレたちは互いに忙しく、
新たにデートに行く予定も立たないまま数ヶ月がすぎた…

—。
—。



そんなある日。

秘書艦の長門を探していたオレは、

執務室併設の仮眠室の扉が開いているのに気づき、

ヒョイと中を覗きこんだ。



予想通り長門は中にいたが、

なぜか彼女は半裸だった。

さらに驚いたのは彼女のお腹だ。

今まで服の上からでは気づかなかったが、

異様にポツコリと膨らんでいる……！

長門は鏡の前で服をまくりあげ、

その膨れたお腹をしげしげと眺めていた。

「ううむ…また大きくなっておる…」

こんなに肥えてしまつては余の威厳が保てぬぞ。

艦隊のみなにも示しがつかぬ…」

「しかしこんなこと江風や陸奥には相談できぬし…」

指揮官にも失望されてしまふやもしれぬ。

うう、だいえつと？に励むべき…なのかな…」

困り顔でそうつぶやく長門。



そういえば最近は食事の量が
少なくなっていた気がする…。

でも…あれはどうみても妊娠してるだろ?!
長門本人はまだ気づいていないみたいだけど…

いや心当たりがないんだから
気づかなくて当然なんだが…

オレのせら、だよなあ…。





オレのせい、だよなあ……。。



オレのせい、だよなあ……。。



オレのせい、だよなあ……。。





「余は長門。重桜の長門であるっ!!
さあ、我が重桜の力にひれ伏すがよい!!」

戦場に長門の声が響き渡る。

旗艦として出撃している彼女は、
今まさにその力で敵を撃滅せんとしていると語るだ。

戦場の彼女は凛々しく、

その実力に裏打ちされた威厳もある。

ただ一つ、その大きなお腹を除けば。



あれから更に時はたち、

とうとう彼女のお腹は隠しきれない大きさになってしまった。


今では服の上からでもポテっとした膨らみをはっきりわかる。

長門と巨大な艦装。

長門と妊娠。

どちらもギャップが大きくて、そのアンバランスさがないまぜになった今の長門は一種独特の魅力がある。

戦場であればなおさらだ。



彼女が妊娠しているのでは？というワワサは絶えずあった。
ただ、長門本人が否定してるため公に語られていないだけだ。
長門自身、まだ妊娠したという自覚がないらしい。

母港への帰還の途、オレは意を決して長門に声をかけた。

「長門、大事な話がある。」

今夜にでも執務室へ来てくれないか？」

「それは構わぬが…急に改まってどうしたというのだ？」


すべてを打ち明けたうえで長門の判断に身を委ねよう。

失望されるか、軽蔑されるか…。


はたまた絶縁されるかもしれない。




でも万が一、長門がオレを許してくれるなら…
オレはポケットのゲッキン指輪を強く握りしめた。

A character with long black hair, yellow eyes, and a white rabbit-ear headpiece stands on the deck of a ship. She wears a red strapless dress with a white shawl and gold jewelry. Her right hand is raised in a gesture. The background shows ship gun turrets and a blue sky with falling pink petals.

でも万が一、長門がオレを許してくれるなら…
オレはポケットのケツコン指輪を強く握りしめた。



でも万が一、長門がオレを許してくれるなら…
オレはポケットのケツコン指輪を強く握りしめた。



でも万が一、長門がオレを許してくれるなら…
オレはポケットのケツコン指輪を強く握りしめた。



あとがき:

はじめまして、またはお久しぶりです。

錫ステラです。ここまで読んでくださりありがとうございました!

今回は長門編です。

もともとは長門のイラストを短文とともにツイートしていただけだったのですが、

何となく始まった連載がストーリー仕立てになり愛着もわいてきて、

この際だから1つの作品にまとめよう!ということで出来上がったのが本作です。

ある意味、ツイッターでたくさんの人に見てもらえたからできた作品と言えます。

次作もまた構想中ですが、アズレンのほか

TSモノのオリジナルも作ってみたいと思っています。

形になってきたらツイッターで情報を出していきたいと思いますので、

ぜひフォローをよろしくです!

それではまた次の作品で!

どうも、作画担当の過ぎた卵白です。

今回のテーマは『主観』。

指揮官になった気分楽しんでくれると嬉しいです!

次回作はもっと上手く描けるように頑張るぞ9(๐ω๐)6

発行日:2020/8/14

発行サークル:雅灯しよこら(過ぎた卵白/錫ステラ)

Twitter: <https://twitter.com/gatotyokov>

Pixiv: <https://www.pixiv.net/users/19949745> (過ぎた卵白)

後日談——。

その後は大騒ぎだった。

オレが長門にプロポーズしたというニュースは
瞬く間に母港中を駆け巡り、

同時に「長門の妊娠」が事実であったことも知れ渡ってしまった。

重桜の巫狐・長門を勝手に孕ませたこと、

そして妊娠のため長期間出撃不能にしまったことで、

一時は重桜陣営や司令部を巻き込んだ騒動にまで発展した。

当然、オレの処分についても俎上に上り、
内々ではオレの解任に向けて話が進んでいたらしい。

……が、結局オレは留任されることになった。
当事者である長門が寛大な措置を求めてくれたためである。
重い罰を課されつつもオレが指揮官を続けていられるのは、
ひとえに長門の温情あってこそなのだ。

その後、長門はオレとケツコンし、出産した。
長門の気持ちの整理とか周囲の反対とか、
もろもろすんなりとは行かなかったが…。

落ち着くところに落ち着いた。
今ではそんな風に思っている。

現在はいわゆる永久秘書艦として、
正規の秘書艦とは別に日々の執務を手伝ってもらっている。



「長門、ちよっとういっかっ。」

母港、執務室控えの間。

休憩中の長門の元へ顔を出すと、

ぎよっとした彼女の顔がオレの目に飛び込んできた。

その胸の中には小さな赤ちゃん。

よほどお腹が空いているのか、

一生懸命に乳首に吸い付いている。

どうやら授乳の真っ最中だったらしい。

「この子がオレと長門の子である。」



「ふ、無礼者！急に入ってくるではない！」

顔を真っ赤にして長門が声を上げる。

見られたのがよっぽど恥ずかしかったらしい。


思い返してみれば、

これまで長門は授乳するところを見せてくれなかったからな。

でも、それで正解だったのかもしれない。


これって刺激が強すぎる！



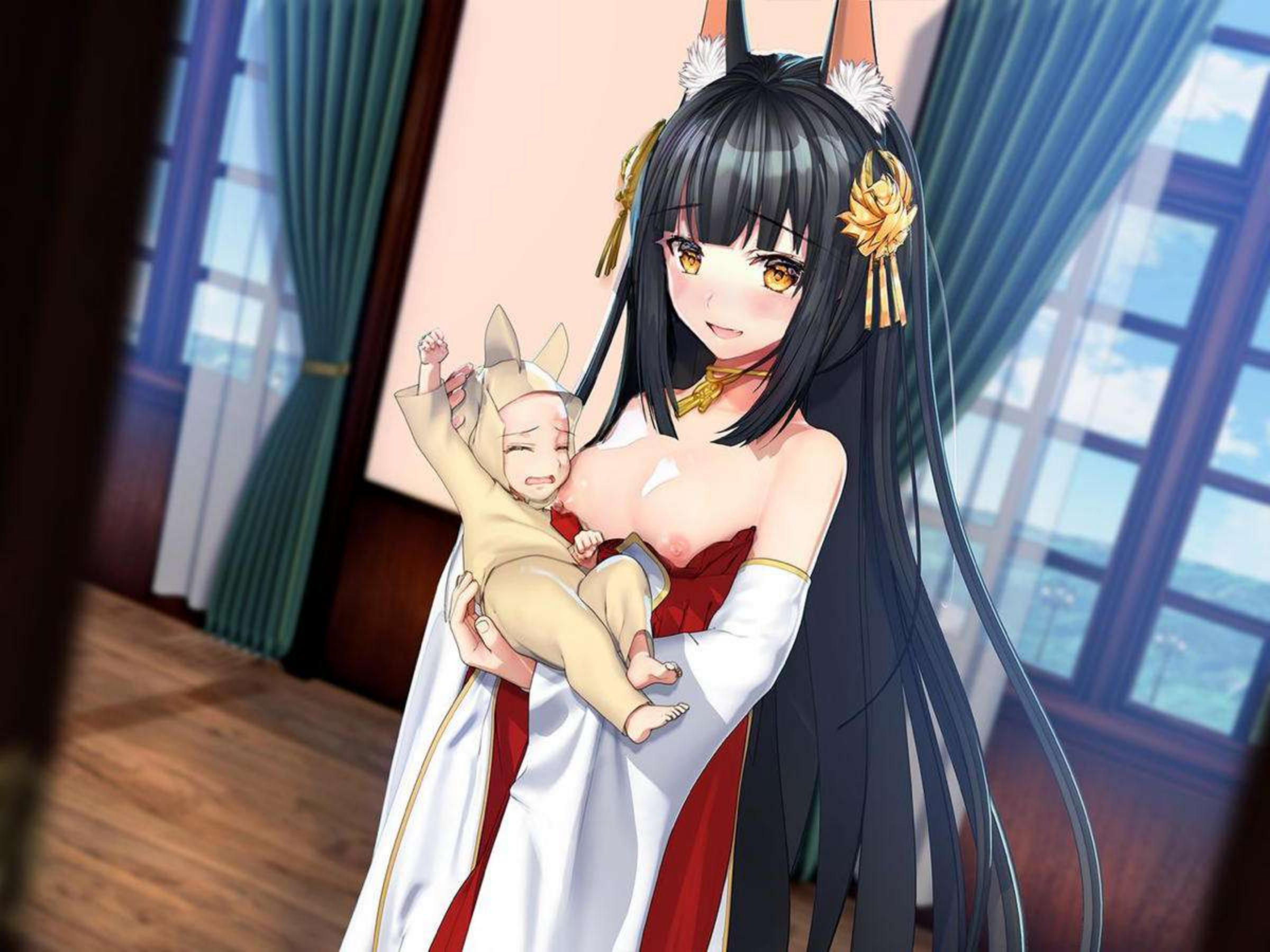


だって、こんなに小柄な長門が
赤ちゃんに授乳してらるんだぞ……？
ギャップがありすぎて……
ドキドキするだろ、みりっ！

そもそもオレがこの長門を孕ませて、
その上この子まで産ませたんだよな……。
ううむ、我ながら罪作りな……。

A black-haired anime girl with long hair and bunny ears is holding a baby. She has a surprised expression. The baby is wearing a yellow hooded outfit. The girl is wearing a white and red dress with a gold necklace. The background shows a window with blue curtains.

とか何とか考えていたら下半身に血が溜まってきた。
今の長門をみて興奮するなんて変態的だけど…
しょうがないだろ！エロいんだ！



「なあ、長門……。」

「余は今、手がふさがっておる。」

「すまぬが用事なら後にしてもらえぬか。」



「そうじゃなくて……長門！今夜から二人目を作ろう！」

「今度こそ長門と一緒に子作りセックスだ！」

「なあっ！……お、お主というやつは……！」

彼女の姿に昂りを抑えられず、

とうとうオレはあの夜以来のアプローチを仕掛けた。

どストレートに。

突然の提案に長門は大きく目を見開いて
驚きの表情を浮かべた。

授乳は中断し、すでに赤かった顔はさらに赤味を増している。
彼女のおまりの急変ぶりに、また怒られる……と思いきや。

「余と……」の子らを幸せにするのだぞ……。
でないと……絶対に許さないんだからね……！」

伏し目がちにオレを見つめながら、
小さな声で長門はそうつぶやいた。





嬉しさが胸の中で爆発する。

今度は、ちゃんとオレの気持ちを受け止めてもらえた！

指揮官として大事なものをたくさん失ったけど。

長門が隣にいるオレはまちがいないく世界一の幸せものだ！！



嬉しさが胸の中で爆発する。

今度は、ちゃんとオレの気持ちを受け止めてもらえた！

指揮官として大事なものをたくさん失ったけど。

長門が隣にいるオレはまちがいでなく世界一の幸せものだ！！



嬉しさが胸の中で爆発する。

今度は、ちゃんとオレの気持ちを受け止めてもらえた！

指揮官として大事なものをたくさん失ったけど。

長門が隣にいるオレはまちがいでなく世界一の幸せものだ！！



嬉しさが胸の中で爆発する。

今度は、ちゃんとオレの気持ちを受け止めてもらえた！

指揮官として大事なものをたくさん失ったけど。

長門が隣にいるオレはまちがいがなく世界一の幸せものだ！！





















































